

2014.7.30 興元寺法話 生と死の問題

2014年7月長崎で少女が殺人をしました。教育界は激震みたいですが、親鸞聖人ならどう感じたでしょう。

親鸞聖人の著書、教行信証に『お釈迦様に敵対したダイバダッタもダイバダッタにそそのかされて、クーデターを起こして父を殺して国王になったアジャセ王も父のピンピサーラ王もアジャセ王の母親のイダイケ夫人も実は私たちに阿弥陀仏の救済とはどういうものか、そして救われる対象者はどんな人か、その人が阿弥陀仏に出遭って完全救済後にどう変わって新しい人生を歩み生まれ変わるかということ、私たちに知らせるために世に現れた仏、菩薩方である』と記しています。

それなら、殺した少女も殺された少女も仏、菩薩方とみたくしょう。私たちに死と生の本当の意味を見つけろと示して下さったと感じれば、見方が変わります。

いのちが尊いと言いながら本当にそう思うなら死刑制度はないはず。戦争放棄もできるはず。しかし、尊い命といいながら矛盾の狭間で命は尊いと概念規定しているだけです。本当の意味での命の尊さを私も知らないからあたふたするのはです。

少女が人を殺してみたかと思ったということは、何も悪いことではないのです。コップを2階から落としたりしたらどうなるのだろうと思って実験する感覚です。実験だから反省も謝罪もありません。答えを見つけることが最優先です。

コップなら誰でも結果がわかりますし、重力という作用で落ちるということを知ることができます。しかし、殺してみたいということは、少女にとって死とはなんだろうと考えたのではないのでしょうか。それにたいして答えられる人がいなかっただけのことです。

そして、殺す縁と殺される縁が両少女にあったのだと、親鸞聖人は言われるでしょう。縁によって人生が左右されるのなら運命論的になって回避不可能に感じます。悪縁が回避不可能なら、どうすれば良縁に出遭うことができるのでしょうか。悪縁を断ち切る方法はないのでしょうか。全く理解不能になりますが、殺した少女も殺された少女もどちらも仏、菩薩方が演じているのであれば、ブツダにとって縁は自由自在に変えられるということを知ったのかと思います。少女がかわいそうなのではなく、私という存在が生も死も知らないで生きているのがかわいそうと仏、菩薩は見ているのでしょう。

命の尊さを知るには科学でも証明できません。倫理道徳でも生と死という概念を説明するには限界があります。仏教思想哲学の領域から見た絶対真理の法則に遵っていのちを見ることが求められています。合掌

写真は大鴨神社みたらし祭

